〈優秀賞〉

静岡県　竹本さん（４０代 男性）

年金なんか払わなくても、将来、誰かがどこかに蓄えてくれたお金で、悠々と暮らせるつもりでいた。もちろん、そのしくみがどのようになっているのかなんて、ちっともわかっていなかった。だから、そんな風に気楽に考えることが出来ていた。

だが、今となっては、もしも年金を払っていなかったとしたら、一体今の自分はどうなってしまっていただろうかと、背筋が寒くなる。就職をして厚生年金に加入したその三ヶ月後、通勤途中で交通事故に遭い、下半身の運動機能を失う障害を背負う羽目に陥ってしまったからだ。

事故直後は意識を失っていた。嘘のような話だが、意識を失っている間に、ごうごうと流れる灰色の大きな川も見た。川の向こうで手招きしている少女のもとに行こうとする僕を、遠くから届く母の声が呼びとめたのだった。

寝たきり生活から車椅子に乗り移っても、衰えた筋力では何一つ自立が出来なかった。食事も排泄も看護師の手を借りなければこなすことが出来ず、苛立ちと焦燥感に何度も押し潰されそうになった。結局、治療とリハビリを繰り返す入院生活は、一年にも及んだ。そして、病院という小社会を離れた僕を待っていたのは、障害者の居場所を持たない現実社会だった。

タクシーには乗車拒否された。路線バスにはリフトが整備されていない。電車のホームに行くためには何人かの駅員に担いでもらわなければならなかった。今でこそ、多くの駅にエレベーターが装備され、バスやタクシーの対応も柔和になってきたが、今から２０年も前の日本では、障害者の居場所が社会の中になかった。

就職も同様だった。車椅子を常時使用している障害者がありつける仕事など、なかなか見つかるものではなかった。

では、何が収入のない僕の暮らしを支えていたのかというと、障害年金だった。生命保険の保険金も入ったが、車椅子で暮らすために自宅を改装してしまったら、あっという間になくなってしまった。

偶数月に２０万円を超えるほどの年金が僕の口座に振り込まれた。はじめはなんでそんな大金が口座に入ってくるのか理解できないでいた。就職するまで国民年金もろくに納めていなかった僕は、就職を機に厚生年金に加入した。もちろんそれは僕の意思などではなく、僕を雇い入れた会社の義務だったにすぎない。でも交通事故に遭遇するまでのたった３か月間加入していただけなのに、加入していたというだけで十分すぎる年金をもらうことが出来たのだった。だからこそ、僕は身震いを覚えるのだ。もしも、就職もしないまま交通事故に遭遇していたら、僕は身体に重大な障害を残しつつも、何の生活の保障もないまま、不整備な社会に放り出されることになったかもしれなかったからだ。

その何年か後には無事に就職もできた。でも、それと入れ替わるように自営業を営んでいた両親が、店をたたんだ。姉と妹はもう嫁いでいたので、６０歳になろうとしている両親を、僕の少ない給料と障害年金で養っていかなければならなかった。

両親の営んでいた飲食店も、景気のいい時もあれば、悪い時もあった。だから、国民年金を十分に納められていたわけではない。年金に関する十分な知識もなく、未納を嵩ませるだけで、免除制度を利用するすべも持たなかった。だから、いざ６０歳になったとしても、両親がそれぞれにもらえる年金は、高が知れていた。

年金のありがたさを知っている僕は、早速両親に付加保険料を納付することを勧めた。パートなどに出掛け、わずかでも収入を得られるようになったら、多少無理をしてでも付加保険料を払って、６５歳になった時に少しでも多くの年金が貰えるようにすべきだという僕の言葉に、親は二つ返事で従ってくれた。両親も僕の交通事故と社会復帰を体験して、障害年金のありがたさを実感していたからに他ならない。

不景気を理由に年金を支払わない若い世代が多いと聞いたが、不景気は年金は支払わない理由にならないと、僕は思う。交通事故に遭遇するまで、僕自身も今の若い連中と同じような考えを持っていたけれど、今は１８０度転換した考えを持っている。

年金は自分の未来を支えるものではない。現役世代が自分たちをはぐくんでくれた先輩たちの老後を支え、自分が現役を退いたときは、残された若い世代に支えてもらうものなのだ。僕自身がみなさんの保険料で救われた。

相互扶助の精神を、中学校や小学校のカリキュラムに折り込むくらい、若い世代に年金の大切さを知ってもらいたいと思う。それは障害年金がなければ今頃家族は引き離され、水準以下の乏しい生活を強いられていたかもしれない僕だからこそ、言えることだと思う。明日は、誰が自分の身体の自由を奪われるかわからない。でも、そんなときに、少しでも悲しい思いをする人がいなくなるよう、年金制度の周知に努めていきたい。今の僕は、それが僕自身の使命であるとも自覚している。